

高橋亨 (1927- / 美術評論家)

2018年6月12日(火)、10月17日(水) 高橋亨邸

—先生は神戸のご出身ですね。お父様、お母様も神戸の方ですか？

両方とも違いますね。昔は神戸出身の人間ってあんまりいないですよ。明治22年に神戸市が生まれた時の人口は13万5千人ほどだったそうですから。私が知っていたのもたいてい播州出身とか四国の生まれでした。

—家族の構成をお伺いできますか？

3人きょうだいです。兄、姉、私が1番下です。姉は2歳上ですけど、兄は13離れています。兄は私が小学校に入る直前、東京の大学に入っているんですね。早稲田の予科。その当時は高等学院といいました。東京へ行く兄を送りに神戸駅に行ったわけです。母と姉と私と3人で。神戸駅というのは西に行けば新開地で。昔は1番の繁華街ですよ、映画館があつて。映画館が初めて出来たの、神戸違います？メリケンパークに山口牧生 [彫刻家、1927-2001] や増田正和 [彫刻家、1931-1992]、小林陸一郎 [彫刻家、1938-] 3人のグループ、「環境造形 Q」 [1968-1988] が作った石の映画館？があるでしょ、スクリーンと前に石の観客席がいくつも並んだ [《メリケンシアター》 1987、神戸市中央区・メリケンパーク]。

そんなんでも新開地に親子3人で映画をよく観に行つて。母親は私を映画館に連れて行くのは嫌だったんです。昔は子供の映画って無かったのか、お涙頂戴の映画ですけど、私が子供のくせに泣くんで連れて行くのが嫌だったんでしょうね。その時はそこであんぱんを買ってもらって食べたんです。ところがそれが原因で病気になってね。疫痢。明くる日から入院です。目覚めて初めて見たのが病室の白い壁と天井の隅っこです。それが人生最初の記憶違いますか。姉と2人で入っていて、姉の膝の足元の隅っこの天井のイメージです。他の記憶みたいなものもあるんですけどね、いつ頃見たか分かりません。ところがその病室の隅っこの記憶はものすごくはっきりしている。なんでか言ったらだいぶ長い間入院していて。私は小学校に半月ほど、いや、ひと月ほど遅れて入学したんです。医者が「もうこれはあかん」て、見放して。姉の方が私より早く退院しました。2つ上だから、多少身体の抵抗力があつたんでしょうね。そういう事で私は小学校の入学式は行っていないんです。助かったからまあ良かったけど。子供の時の世の中の第一印象といったらそういう事です。

その次のはっきりした記憶というのは1年生の時の受け持ちの女の先生の事ですね。緑の袴に、和服で教壇に立っていて。そのイメージを覚えています。眼鏡をかけた、あんまり優しくない先生でした。2年生になってもまだ身体が弱かった。当時、身体が弱い生徒だけを集めて1クラス作っていたんです。私もそこにいる。先生は優しいおじさんという感じでした。そのクラスは「弱組^{よわぐみ}」と呼ばれていて。正式な名前じゃないですよ。弱組は、朝の朝礼の時も運動場へ行かないんです。教室が2階で。その上の屋上が弱組の遊び場だったんですね。

3年の時の先生は専門が工作だったんです。彫刻家でした。成人して美術を担当するようにな

ってから、あるとき天王寺の美術館 [大阪市立美術館] の正面の石段を降りて行ったら下からその先生が上ってこられたので挨拶したら覚えてくれてはって。東山正久さんいいましてね、後に二科会の彫刻の会員になる人です。

父兄会、今でいう PTA の授業参観で。後ろの黒板の真ん中に何と書いてあったかと言いますとね、ひらがなで大きく「なまけもの」と書いてあって。横に「高橋亨」と書かれている。ギョッとしますよね。入って来てうちの母親があれを見たらどうしようか、と思いました。ところが入ってきたら後ろの黒板を背にして前を見ているから、母はそれを見なかったようです。宿題なんか全然しないなまけものでした。そのなまけもののは話は 4 年生。5 年生の時にもなまけもの記憶があります。夏休みが明けて宿題を提出しなきゃいけないんですけど、私は何にも書いてなくて。あんまり恥ずかしくて格好悪いから、1 日休んだ事があります。1 日休んで書いたんですけど、何も書く事あれへんのです。そんな、覚えていませんしね。その日は雨とか、新聞を見たりして。それしか書けないから、それで出して。

ところが 5 年生の時はね、学校の代表になっていました。その頃ドイツと日本は同盟を組んでいて。ドイツのヒトラーの、ヒトラーユーゲントという、訳せばヒトラー少年団ですね。20〜30 人おったかな。日本を訪問して神戸に寄って、湊川神社に参拝に来るのを迎えに行きました。湊川神社の正面の門から拝殿までの参道の両側に神戸の小学校の代表が 1 人ずつ並んで校旗を持って迎えたんです。担任の先生が 1 人付いて電車で行ったんですけど。同じ位の歳だけど向こうの方が身体大きいでしょう。我々が並んでいる前をパッパッと歩いていく。その旗を持っていく役を私が、全校代表として行ったわけ。何で行ったかと言いますとね、勉強がよく出来たからと思うでしょう。でも、全校一という訳ではないっていう。なまけものだから (笑)。5 年生の時、級長をしていましたけど。級長をする人は成績が良い訳なんですけど、1 番良い訳では無い。1 番良いのは 1 学期の級長です。今申し上げたのは 2 学期の話。2 学期になったら級長は変わるわけです。つまり 2 番目ってこと、せいぜい 2 番目 (笑)。

一でも先生、宿題をしなかったのに成績は良かったんですね。

成績は良かった。宿題は点数になんか入りませんから。成績は良かったんですけど、2 番になれたのは勉強の成績だけじゃなしに、体操とか絵とか習字とか、そっちの方の点数が良かったから。勉強が出来る子どもというのは逆に体操なんかは出来ないことが多い。図画とか習字も。私はそっちが得意で。そういう事が 5 年も、6 年も。2 年続けてありまして。1 学期 [の級長に] はなれません。

一ヒトラーユーゲントをご覧になって、何か覚えていらっしゃるでしょうか。

さーっと歩いていただけを覚えているだけで。その後、ヒトラーユーゲントも市内の小学校の代表も東遊園地に行って。今の市役所の隣の。あそこは昔運動場やった。ラグビーなんかが出来たんです。その傍に外人クラブというのがあって。

—今の神戸クラブですね、居留地の辺りの。

そこで[ヒトラユーゲントの]歓迎式典みたいのをやるという事で先生と行ったんですけどね。先生はなぜかこれはもう帰ろうと言って。帰りがけに三宮の駅前のそごう百貨店、当時からあって。そこの食堂で何か食べよう言うわけです。焼きりんご食べようって先生が。自分が好きやがたんと思います。私、焼きりんごよう食べんから。慌ててホットケーキ欲しいって言って(笑)。

—当時、日本とドイツは同盟関係だったわけですが、先生は連れて行った子供たちに対して何か説明をされましたか？たとえばドイツの少年将校の事とか。

いや、別に何も先生は言われなかったですね。ただ申し上げた様に、外人クラブの式典を抜け出した訳ですから。そこで多分そんな話が出ていると思います。僕らは焼きりんごですけど(笑)。

—先生もなんで生徒を連れ出したんでしょうね。最後まで連れて行かなかったわけですよね。

入り口までは行ったんですよ。中を覗いて「ここはええやろ」と帰って。途中で焼きりんごに(笑)。この5年の時の担任の先生は成人してからまた会うんです。6年生の時は何にもなかったな。隣の校区から変わってきた先生で、ちょっと私のいた小学校とはタイプの違う先生。私がいたのは東須磨小学校 [神戸市須磨区]。

—小学生の時は何をして遊んでいらっやいましたか？

子供の時はね、男の子は相撲ですね。私は相撲強かったですよ。学校代表で他所の試合に行きました。たちまち負けましたけどね(笑)。

—昔から身体が細かったんですか。

細くはなかったですけど、肥えてもいませんでした。筋肉質でしたね。高等学校になってからですけどね、相撲を取るとなると私ととるのをみんな嫌がりました。身体が硬いからみんな痛いと言って。

—中学時代のお話をお伺いできますか？

私が入った中学というのは神戸の二中、兵庫県立第二神戸中学校という所 [現・兵庫県立兵庫高等学校]。神戸市の西の方。須磨区じゃないんですけど、すぐ隣にあって。一中 [兵庫県立第一神戸中学校。現・兵庫県立神戸高等学校] は灘にあって。神戸市の東の方の子は一中に行くことが多かった。西の方は二中に。僕らの頃も中学校いえば初めから二中という頭でしたね。どこに行くか考えた事もなかった。

—二中はどの辺にあったんですか。

長田ですね。長田神社のちょっと東。二中というのは、美術は良かったですよ。小磯良平、日本画で東山魁夷、ふたりが代表的な出身画家です。何年の時か忘れましたが、他所から講演する

人を招いて講堂で話を聞いた事がありまして。何の話の時やったかな、変におかしくてね。ゲラゲラ笑ったんです。その話をしている人が、途中で変な顔して僕の顔見て。おかしいやからしゃあない。止まらへん。済んでから先生に呼ばれて、怒られて。訓育室という悪い事をした生徒を閉じ込める小さい部屋がありましてね。そこへ一人で入れられて。説教された訳ではないんですけど。1時間位かな。ガラスの戸棚があって、中に小磯良平の絵があって。今思えばせいぜい40号位かな。椅子に座った女性の絵ですわ。そこに入れられたお陰で小磯良平の絵と(笑)。

私、小学校の時もそうですけど中学校の時も絵が上手かったんです。その時の絵の先生というのは一中と二中と掛け持ちでやっている先生でした。大概写生ですよ。いくつかのテーブルの上に何か置いて、周りで何人かが描く。大概そういう授業でしたけど。ところがその先生が描き方を指導する時、皆に見せるのが僕の絵なんです。何でそんな事があったかと言うと、テーブルの上にものを置いて、学校の事やからあんまり掃除してないでしょ。埃溜まりますよね。ちょっとグレーっぽく見えるんです。僕はそのグレーの感じそのままに絵の具を塗って。ところがみんなね、そうじゃなしに机の色を描きよるんです。茶色やったら茶色で。それで先生は僕の絵をこう[見せて]。何遍もそういう事がありましたね。友達がとうとうね、自分の机を僕の隣に持って来て僕の絵を見ながら描きよるんです。しかし昔はそんなことで美術関係、絵の学校に行くとか全然考えませんでしたね。偉い先輩もいるのに全然考えてなかった。行っといたらよかった…とは思いませんよ。行っても小磯良平にはなれません(笑)。

—子どもの頃は何にご興味をお持ちでしたか？美術館にはその頃は行かれましたか？

全然行かなかったですね。神戸に美術館なかったです。大阪で言えば天王寺[大阪市立美術館]ですけどね。

—中学を卒業されて、高校へ。

旧制高校ですけど、私は姫路に行ったんです[旧制姫路高等学校]。そこには美術なんかありませんけど。文科と理科とあって、私は文科です。ドイツ語の先生が時々絵の話をしてくれるんです。自分の好きな絵描きの画集を持ってきて教壇の上でそれを見せて。それでその時間が終わるとかね。みんなそれを「紙芝居」と言っていましたね。勉強せんでもいいでしょう。そんなんやっぱり良かったと思いますね。どんな絵を見せてくれたか覚えてないですけど、その時間は楽しかったです。昔の学校というのはそういった余裕がありましたね。

—高校でもうドイツ語の授業があったのですね。

ありましたね。入る時から分かれていましてね。文科の甲類、乙類という。フランス語がある所は丙類も。私は中学校の時は割と英語の成績は良かったので、英語には興味を持って親近感がありました。英語の文科甲類に入りました。乙類に入る者ももちろん同じくらい数はいましたけど。今やったらドイツ語に行った方が良かったかなと思います。というのは、英語は中学校でもある程度やっているでしょう。ドイツ語やったら初めてですから。大学へ進んでからはドイツ語

の知識があった方が良かったかなとは思いましたね。

高等学校の時からラグビーを始めまして。神戸の二中というのはラグビーが有名で強かったんです。全国優勝したことも [ありました]。二中の時も休み時間にラグビーの真似事をしたりして親近感がありました。だけどラグビー部に入るなんて考えもしなかった。ラグビー部なんてガラが悪いというか (笑)。高校に入って1年目は決まりで寮に入れられて。そこへ色んな部から勧誘の学生がやって来んです。ちょうどラグビー部のキャプテンをやっていたのが神戸の一中の卒業生で。「君、どこの学校や」と聞かれて、「二中です」と答えたら、じゃあラグビー部に入れ、と。半ば強制的に入れられてしまった。親近感があったから特に嫌でもなく。大学に入っても結局ラグビーを。まあ5~6年はやっていたんですね。いっぺん新聞に載ったこともあります。大学で慶應との試合の時にね、バックの一番端っこ、左のウィングという所が僕のポジションやったんです。そこは足の速い奴がやるんです。私はそこをやるほど足は速くなかったんですけどね。他の奴はもっと遅かったんでしょう (笑)。隣のポジションはセンター。センターは柔道四段の大きい男で。ところがちょっと動作が鈍いというか。相手がボールをパスしながら攻めて来るでしょう。原則なら自分の相手、対面にタックルせなあかんのですけど、そいつがせえへんで僕の所まで来るわけです。そこでそれを逃したら決定的に行かれるから。しゃあないから私がタックルして、それがうまいこと3回くらい決まりましてねえ。それで写真撮られて、新聞に [載って]。「慶應バックスの突進を東大高橋タックルで防ぐ」という。

今とは全然違いますね。食べ物が違うでしょう。我々の頃はろくすっぽ食べ物がないから。当時の食べ物事情、ご存知ないでしょう。お米の配給制度ってご存知ですか。一人2合3勺。学生の頃からですね。それ以上食べることが出来ないんです。どこへ行っても何もあれへんです。これは姫路の話ですけど、街へ出ても食べ物屋なんか全くない。一度学校の近くで店を見つけて入ったら、吸い物ですけど、ほんまの吸い物で何も入ってない。汁だけ。大学へ行ってからね、店で食べる事も出来るんですけど、外食券というのがあって。要するに二合三勺の配給のお米の分を返上して、代わりに外食券を貰うわけです。それを持っていかんと街では食べられないんです。

—この頃は戦争に入っているのでしょうか？

今の話は戦後です。

—戦後の方が食べ物がなかったと聞きます。

そうですね、戦後の方がなかったかも知れません。人も増えたし。兵隊が帰ってきて。

—戦争のご記憶はおありですか？

戦争…そうですね。戦争中は陸軍にしる海軍にしる、軍人になる学校が人気でしたね。陸軍の場合は陸軍士官学校。海軍は海軍兵学校。両方とも出たら幹部候補生、将校になる。人気やったですよ。陸軍の場合は中学校の1、2年から入る陸軍幼年学校。これがもう言ったら1番の軍人

養成の学校ですよ。叩き込む。ちょっとしか行けなかったですけどね。海軍兵学校の場合は一般の仕事を覚える訳。それからもう一つ海軍経理学校、お金の計算です。これが一番難しかった。そういう所を受ける人が多かったです。私は行かなかったけど。

—全然ご興味はなかったんですか。

そうじゃなしに行っても通らへんやろと思ったから（笑）。

—（奥様）予科練を受けたのよね。

予科練、予科練習生言いますよね。要するに飛行機の飛行士を養成する。林さん〔林康夫、陶芸家、1928-〕が行っていた所。実は私も通^{とお}っているんです。なんでか言うとね、勤労働員で中学校5年の時、二中の学生は神戸の三菱造船所に行きっぱなしでした。全然勉強しなかったんちゃうかな。みんな喜んでいましたけどね、勉強せんでいいから。そこへ神戸の刑務所の囚人も来るんですよ。寒いのにね、冬でも人絹のペラペラの作業着を1枚着てね。その造船所で先生に集められて。「予科練を受ける者はないか」って言って見回すんです。数学の先生で。私、数学あかんからすぐ睨まれてね。あだ名がイタチいう、意地悪そうな感じの先生で。イタチと私と目が合った訳です。で思わず手を挙げて。そうしたらまあ、すぐ通って。同じ頃、陸軍航空士官学校というのが新たに出来て。戦争末期で。そこはこっちから進んで受けた訳です。ただ視力が両眼とも1.0でないと。私は右は1.0なんですけど左は0.8で。それでもうあかんかったんです。予科練は0.8以上あったら良かったんで、緩かったんですね。予科練は目〔視力〕もパスしてほんまやったら林さんみたいに行かなあかんのですけどね。行くより前に高等学校の試験の発表があつてそっちに行ったわけです。私は高等学校の方が憧れでしたから。そういう事で軍隊の学校は止めにして。そっちに行っていたら林さんと一緒でしたね。

—東京大学文学部に進学される訳ですが、最初から美学美術史を専攻されたのですか？

いや、それもまあ色々あるんです。中学校の成績はあまり良くなかったんです、なまけものですから。二中というのはその当時、1学年300人で50人クラスが6つあったんです。1クラスの中でやっと10位以内というところですね。もっと良くなかったらあきませんねん、ほんまは。

—でもやっぱり東大に入るのはすごく勉強しないと。

そう思うでしょう（笑）。高等学校は当時全国で30校くらいですわ。高等学校を出ていたらどこかの帝国大学には入れる人数やったんですね。ところが皆、選ぶでしょう。医学部に行きたいとか、法学部に行きたいとか。だから何倍かになってしまうわけです。それがなければ試験で行けるわけです。人数からいえば。

—でもそうなるとう高等学校に入るのが大変という事になりますね。

いや、案外そんな事はないですよ。いやほんま。それはいい所に行くのは大変ですよ。一番い

いのはもちろん第一高等学校、一高。一高なんか私、初めからそんなん絶対行きません。例えば佐賀の中学校から一高に入った人で知っている人がいるんですけど、神童やと言われていたそうです。その位、一高というのは難しかったです。大学も行く学科を考えればそんな難しい事は無いですよ。私は高等学校へ行ってね、大学出て何になるか、どういう仕事をするか、したいか、全然考えていなかったですね。ニートとか言うでしょ、あんなもんでね。全然考えていなかった。勉強もせえへんかったし。

勉強せえへん事でね、もう一つなまけものの続きがあるんです。中学校行ってやっぱり宿題類はしなかった。2年生の時かな、夏休みの宿題に昆虫採集というのがあって。生物の先生が出て。標本を作ってからガラス張りの箱に入れて提出せんといかん。ところが私は1匹も取ってなかった。しゃあないから出さんと。2学期の終わり近くになりましてね、先生が「お前出してない」って呼び出されて怒られて。しゃあないから植物採集せえって言われて。割と山は近いですから、上がる草花がいっぱい生えている所があるんです。ところが冬でしょう。何にもない訳です、枯れて。ですから植物採取もできひんわけです。相変わらずなまけものが続いていたんですね。

3年になって大学を受けなあかん、となって東大の文学部の英文学科を受けました。英語は中学の時から割と得意やったから。ところがもう軽く滑りましてね。その頃、昭和23年、戦争が終わってすぐの頃で英語が人気やった訳です。だから受験生が多かった。私みたいな奴が行ってもあかんかった。それで要するに浪人になったんです。当時、浪人は多かったです。高等学校というのは黒い帽子に線が二本入って、白線が。白線浪人って言われて。で、私も白線浪人になったんですね。ぶらぶらしていたら、同じ二中の友達がやって来て「先生せえへんか」というわけです。中学校の先生ですね。その時学制が変わって、[中学校が]5年制から3年制になりましたね。多分先生が足りなかったん違うかなと思います。僕の友達も神戸の高等工業学校出て、そのまま就職すれば良いんですけど京都大学を受けて滑った男で。先生をしていたわけですけど、[もっと先生を]呼んで来い、言われたんやろね。じゃ、やるかということで英語の先生になったけど。昔の高等学校は卒業したら先生の資格があったんですね。正教員です。ただし師範学校を出た先生は1級。我々は2級。ちょっと差がありましたけど。そんな奴が何人も入ってきましてね。二中で僕入れて4人。一高を出た男もおりました。6、7人おりましたね、そういうタイプの先生が。

そういう調子で先生しながら浪人生活をしていたんですけど。3月まではやらんと途中で辞めて。辞めんと大学が受けられませんから。高等学校の友達で卒業滑って留年した奴がおったんです。そいつは自分が卒業できなかったものだから「高橋はどうやった？あいつはあかんのちゃうか？」って同級生に聞いて。ところがどっこいこっちは卒業しています(笑)。その男は留年して姫路で下宿を続けていたわけです。そこへ行ってね、どこを受けようかって相談したんです。でもまた滑ったらあかんで英文はやめやあって言っ。美学美術史学科というのがあって。さっき言いましたように授業でそういう「紙芝居」で、割と美術に関心があったのでこれにしよう。そういうきっかけで、別に美学美術史が本気にしたかったわけではないです。

ええ加減の入り方してもちゃんと勉強して入ってもあまり変わりませんよ、学生は。さっきも言いましたようにね、何になろうかという頭が全然ないんですよ。美学美術史に行っても、美術館とかまるで考えていなかったです。ちゃんと考えている奴もいましたけど、私は全然考えていなかった。卒業の時期が来て。向こう引き払って神戸に帰ってきて。そうしたら東京にいた友達から電報が来て、「お前、すぐ出てこい」って。慌てて行ったら卒業生の名簿に名前が出ていない。事務室に行ったら、「授業料払ってへんやろ」って。使い込んでしまっ。なんとか送ってもらって。ぎょっとしましたよ。

それで卒業は出来たんですけど、何になるというあてが全然ない。うちの者が心配しますよね。姉の旦那の勤めが川崎重工業で、転勤で東京に住んでいたんですけどね。その人から産経新聞を受けたらどうやって言われて。ところが私、「産経てなんや」って言ったんです。産経という新聞がある事を知らなかった。産経新聞って聞いたことがないし、「経済は全然知らんからあかん」と言ったんですけど。「いやいや一般紙や」って。で、受けたわけ。一方で家の方では神戸新聞を受けると。知っている人がおったのかな。両方受けたわけです。で、両方とも通って。ところが産経の方が1週間ほど通知が早かったんです。だから早い方に行かなあかんと思って産経に行ったんです。入ったんやけど東京で入ったわけですから。大阪に行きたいって言いました。そしたらもう一度大阪で試験受けると。そんなにややこしい試験ではなくて簡単な面接だけやったんですけどね。で、大阪に。

新聞記者[の仕事]っていうのは全然知らなかったです。新聞というと東京で学生時代に東京新聞を駅売なんかで買って読んでいました。東京新聞は当時文化面が充実していて。だから新聞っていうのはそれだけやし、どんな仕事をしているか知らなかった。新聞記者のイメージと思ったら革のカバンでも下げて出社して、というようなイメージでした。ところが革のカバンなんか誰も持っていない、紙袋(笑)。産経に婦人部というのがありまして。珍しかったんです、当時。家庭面を充実させようって。産経、大阪に来て仕事を始めたんですけど、3カ月間が研修期間で。初めはみんな社会部でしてね。僕は大阪の警視庁に配属されて。その頃大阪も警視庁といってね、府警と別に警視庁があった。警視庁というのは要するに大阪市内だけ。他の府下のところは国警。国家警察かな。そこが管轄している訳です。3ヶ月済んで今度はどこに配属されるか、社会部長を囲んでみんな話をして。「君は社会部に行け、社会部の仕事も出来そうやし」と言われたんですけど、初めから考えたことないから嫌だと言って、すったもんだしてね。とうとうほんなら文化部に行けと言われた。それで文化部に行って。半分以上女の人です。年長の人が多かった。その頃まだ婦人部と文化部と分かれていましたけど。そのうち一緒になりましたね。婦人も文化部に入ってきて。そこで私は初め映画を担当させられて。1年、2年位かな。そんなに長くはなかったです。近くでロケがあったらロケを見に行ったり。京都の撮影所はあんまり行った記憶ないなあ。宝塚に宝塚映画というのがあって、東宝系の映画会社。そこは何度か覗きましたね。それから三船敏郎[俳優、1920-1997]が何かのロケで姫路に来ていて取材して来いと言われて会ったんですけど。物言えへん。こっちが何か尋ねるでしょう、そうすると、「うん」とか「あー」とか言うだけで言葉にならない。そのうちにだんだん話し始めましたけど。でも困りましたね。広島

の、鞆の浦。そこのロケに行きましたが。来ているのが谷口千吉 [映画監督、1912-2007] と八千草薫 [俳優、1931-]。仕事はそこそこに、漁港に行って。中学校の頃川崎造船所に行っている時に遊びで伝馬船を覚えて、鞆の浦に行ってぶらぶらしていたら船があるから乗って漕ぎ出そうかと思っていたら、八千草薫が歩いて来るので「乗りませんか」言ったら、乗ってきてね。八千草薫を乗せて港の中を一周しました。まだ八千草薫も出だしの頃ですからね。可愛らしい人でしたね。谷口千吉と結婚しちゃったけど (笑)。

そうしてるうちに、司馬遼太郎 [小説家、1923-1996]、[本名は] 福田定一いうんですけど。京都支局から大阪本社に転勤になって、文化部に来ました。彼は文学、それから美術の担当で。間もなくして、「君、美術やらへんか」と言うから。「元々映画ではないから、美術やりますよ」と言っただけで。福田定一は主に文学の仕事をしていましたね。福田定一の前に美術をやっていた人は、かなりいい年の人で。元々は歌舞伎とかそういう日本の演劇の専門の人でしたね。台本を書いたりしていたみたいです。その人が美術も持っていた訳で。一緒に天王寺 [大阪市立美術館] に行った事もあるんですけど、ものすごく目が近い人です。大きい絵は側へ行って、隅っこだけ見て「いいなあ」とか言うんです。そんな隅っこだけ見て、何が [分かるのか]。芝居とかそういう専門でやっていたから、そんなんで良かったいうか、ちゃんと美術を担当していた者は居なかったという事ですね。だから福田定一も美術評論なんて書いていないですよ。それほど時間はなかった。まあそういう事で産経はひとまず終わりですね。

—産経の文化部にいらしたのは、1950年代にでしょうか。

あまり覚えてないけどひとつ手がかりになるのは昭和 33 年ですね。その時に各社の美術記者がこんな。[資料を出して] 美術記者クラブです。村松寛 [美術評論家・元朝日新聞記者、1912-1988]、入っているでしょ、鈴木敬も。

—村松寛さんの後は朝日新聞は…?

村松さんの後は天野 [景治] さんですね。

— [美術記者クラブの資料を見ながら] 全員男性ですね。美術記者に女性はいなかったですか？
いないですね。ほんま。確かにいないですね。

—鴨居羊子 [下着デザイナー、1925-1991] さんは読売ですね。

読売です。大体時期的に重なっている時期もありますけれども。あんまり覚えていません。つまりデザイナーになってからの方が [知っている]。美術記者ってほんまに女性いないですね。

この美術記者クラブというのはね、この頃美術記者が一番充実と言ったらおかしいけど、各社色々あった時期だと思えますけどね。毎日新聞にいた杉本亀久雄さんが中心になって、美術記者クラブを作るんやと言って。彼が天王寺の美術館 [大阪市立美術館] に行って「部屋を都合してくれへんか」と [交渉して]。何とかして借りられて、こんな名簿を作ったんですけどね。ところ

がそこまではいいんですけどね、できてから誰も行かへん。遠いでしょあんな所。不便ですねん。私も行ったことない（笑）。

—記者の皆さんは堂島、中之島界限ですもんね。

はい。誰も行かへんからやめや、と言って。すぐやめてしまいました。これだけの事（笑）。

—面白いですね。京都が入っていないんですね。

うん。京都いう所は…あそこだけちょっと離れているというか、独立しているというか。

—この中でいうと先生はかなり若い方になるのでしょうか。

わりかた歳いった人も多いですね。村松寛がどんな人かっていうと、私よりも15上です。だからまあ言ったらこの中で一番のベテランですね。私が産経に入って美術担当になって回り始めた頃に会った。随分先輩ですよ。

—記者の中でも村松寛さんは大先輩という感じですね。

そうですね。他の朝日の天野さんもかなり年配ですけど、美術をじっくりやったかという点ではちょっと違いますね。村松さんは著作を出して。最初に出しはったのが『美術館散歩』[1960]という本です。

—村松寛さんはどこの方でしょうか。大阪ですか？

いや大阪じゃなくて、京都。京都のど真ん中ですね、堺町。お父さんが書の人だとちらっと聞いたような気がします。真面目なきっちりした人ですね。話好きで。どう言ったらいいかな。最初に出された『美術館散歩』というタイトルの本は、昭和35年やったと思います。その本の出版記念会を、桜橋にあった産経会館の産経パーラーという所でやって。その時私が司会しまして。村松さんは司会なんかさせたら上手いんですけど、私が下手な司会を。

—村松さんはものすごい数の展覧会をご覧になるんですよ。

きっちりしてますわ。見たやつちゃんと書いています。ほんまきっちりしています。『美術館散歩』でも何でも記録していないと書けん本です。和歌山県立近代美術館に村松さんの資料がたくさんあるでしょう。寄贈されたのは随分前ですよ。

—村松さんの資料が和歌山近美に入った経緯というのは？

特別に関係があるわけじゃないですよ。県立の美術館としてこの近辺では和歌山が早かったでしょう。どこかに寄贈したいと考えて、考えたら他ないですからね。大阪にもまだ天王寺しかないからね。ということ違うかなと思いますけど。

一背の高いハンサムな方でしたね。いつもニコニコして。私〔森口まどか〕がお目にかかった時はですけど。私が京阪百貨店に勤めていた時に当時社長の中西徹さんと村松さんと仲良かったんで、しょっちゅう百貨店に来てくれはったんですよ。中西さんが、「ええなああんたは。村松さんて、ものすごい怖い人。有名な記者やってんで」と。せやけど丸ならはって。私なんかは孫みたいなものですから可愛がってもらえましたね。

そうですね、背が高い。まあ親しみやすい人です。梅田画廊が梅田近代美術館というのを一時作った時に村松寛さんは館長をされて。その時に元々〔朝日新聞の〕学芸部だったのが企画部に変わって、企画部次長か何かになったんですね。傍ら梅田の美術館長やっていて。ある日僕に連絡があって、ちょっと相談があると。来てくれ言うから朝日新聞の本社に行って企画部の人と一緒に話して。後の「アート・ナウ」〔1974・2000、兵庫県立近代美術館、現・兵庫県立美術館〕ね。「あんな展覧会をしよう思ってるんやけど、一緒にやってくれへんか」と。後日、梅田近代美術館の一室で何人集まったかな。5〜6人くらい集まったかな。小磯良平さんも来ていたかな。何人か集まってどんな展覧会しようかと。村松さんなんかの頭には、昔やっていた朝日新人展がありましたね。それなかなか良かったんですけど。そういう頭があって、今度どないしようと。皆で考えたんですけど、なかなかタイトルが出てけえへんから。僕が言ったらあれなんですけど、イギリスのハーバード・リードの『今日の芸術』〔1973〕が浮かんで。「アート・ナウ」という。それを皆に話したら、じゃあそうしようということになって。最初梅田でやったのは「アサヒ＝アート・ナウ」〔梅田近代美術館、1973〕。第1回やった訳ですね。梅田近代美術館というのはワンフロアですから。あまり広くなかったんですね。明るる年、2回目は兵庫近美で。朝日が主催ということはそのままですけども、朝日の名前をとって、ただの「アート・ナウ」ですね。それで始まったわけです。だけどあの展覧会は良かったですね。作家に刺激になったん違うかな。

結局かなり長い事やって終わりになったんですけど。ここだけの話で言えばね、最後何年間か、他から評論家とかが集まってメンバーを考えるとというやり方がやめになって、学芸員だけで話をしていたでしょう。兵庫県美の学芸員だけでメンバー〔出品作家〕を考えて、ちょっと変わりましたね。なぜ変わったかと言いますとね、学芸員の方を目の前に置いてなんですけど、あまり学芸員は展覧会を見ていないです。仕事をそれぞれしているから、ぶらぶら美術記者みたいに行きませんからね。いきおい、やっぱり展覧会をあんまり見ていないです。だから美術の様子があまり分かっていない。その中で選んだらやっぱり違ってくると思うんです。この頃も美術の状況も何だか変でしょう。ぱっとしないでしょう。なんでかな思いますけどね。ひとつは漫画の影響ですね。みんな漫画っぽい表現をしたりね。

—「アート・ナウ」について、当時兵庫近美でご興味をお持ちの方がいらしたからそういう展開になったのでしょうか？

まあそうでしょうね。当時兵庫の副館長か学芸課長か…増田洋〔1932-1997〕という人がおりましたね。その時の話ですから。彼が興味を持ったんでしょう、多分。早く亡くなりましてね。私

の中学校の後輩ですわ。4年くらい歳下かな。かなり長いこと「アート・ナウ」してましたね。

— 当時、特に印象の残った作家さんはいらっしゃいましたか？

特にこの作家という風に考えるのは難しいですね。たとえば中西學 [美術家、1958-] とか。面白い仕事していますよね。まだ出たての、元気のいい時。

— 「アート・ナウ」は若い方が多かったんですか？

若い方が多かったけど、中年も含めていますよ。新人展じゃなしに、感じとしてはもうちょっと上のクラスまで含まれていたと思います。

村松さんのことでいえば、「アート・ナウ」が出来るきっかけを作ってくれたわけですから。そういう意味で村松さんの仕事としてあげることが出来るんじゃないかと思いますけどね。彼がそういうことを言いたさなければ多分できていないですから。村松さんはどういう人かというとな、美術の評論的な仕事はもちろん新聞に書いとったわけですが、いわゆる評論家のタイプとはちょっと違いますね。美術ジャーナリストと言ったほうがいいんじゃないかと。きっちり仕事をする人、真面目に。評論家というのは自分の考えだけ言っておけばええんやから。ジャーナリストはそうは行きません。ジャーナリストは公平に見なくてはいけないから。団体展が美術界でだんだん弱まって行って、新しいタイプの作家が出はじめて。評論家やったらそっちの方だけに行っても構わないですけど、ジャーナリストはまだ団体展が消えたわけじゃないですから、その事も触れんわけにはいかないですよ。両方目配りせんといかん。

— 十河巖 [1904-1982] さんも朝日新聞ですね。

そう、彼は学芸部じゃなくて社会部だけ。自分で絵を描いていましたから。展覧会もやって。

— 先生に美術記者のいろはを教えてください、どなたになるんでしょうか？

言葉で教えてもらった事は無いんですけど、影響を受けるという事がありましたね。昔は他の新聞社の記者との接触が多かったですよ。例えば読売の文化部の人が懇親会開くって言ってね。高槻の奥の方の温泉場で飲み会をやった事がありました。そこに僕も潜り込んでね。他所の新聞記者が (笑)。だからわりかたそういう風と同じ新聞社の者より、同じ仕事をしている他の新聞社の記者との方が繋がりを持っていました。そんな時期です。[美術記者は]ものすごく暇なんです、美術しか持ってないから。今の記者は色んなものを持ってるでしょう。だから具体的に言えば、ぶらぶらどこかのギャラリーを覗いて、見るのもすぐ見て、もう他に行く所もそんなにないし。梅田画廊が近いから溜まりやすいんですけど。そこでうろろろして。例えば鈴木敬さんがやって来るわけです、同じように暇なんで。4時ぐらいになったら「どっか行こか」言って。会社には電話で「帰る」と言ったらそれで良かったんです、当時は。せやから自分ところの社よりよその社の同じ仕事の人の方が付き合いが多い。

—先生が具体美術協会をご覧になる事が多かったのは、やはりグタイピナコテカですか？

そうですね。入り浸るほど行ってないですけどね。近いから。あと大体「具体」の展覧会は高島屋でしょ。高島屋も何回か行って。

—それは記者時代ですか？

そうです。「具体」の事は美術手帖なんかに書きましたね。

—グタイピナコテカは、展覧会の時に行くのと作家もいるのでしょうか？

作家もちらほらいますよ。吉原さんもね。女性の事務の人が常駐していましたけど。そのほかに「具体」の人間もおったりね。それも当番でいるのではなくて勝手にうろうろしている感じ。

—「具体」をやっていた当時在野団体もありましたよね。先生は記者として在野団体もご覧になっていたかと思いますが、その違いはどう見ておられましたか？

「具体」ができたのが昭和 29 年でしょう。昭和 20 年代の後半というのはまだ昔の団体展の影響が残っていましたね。昭和 30 年代の前半になって。例えばね、美術記者やっていると、美術記者と評論家の立場、見方はちょっと違う訳です。何が違うかという、新聞記者というのはまんべんなく、あるいは公平に美術界に反映させなアカンという意識がありますけれども。評論家というのは何でも自分が注目する傾向とかを取り上げていったらいいわけですよ。全体的なバランスを考える必要がないでしょう、評論家というのは。自分の思いを打ち出していけば良いわけですから。そういう違いがありますからね。

「具体」なんか見る場合でも、そういう立場の違いによって違ってくるという事もあります。「具体」の場合は東京と大阪で違いますよね、受け取り方が。東京の人はなかなか「具体」を認めなかったでしょう。大阪の方は、わりかたどういかなあ、まあ素直に受け入れていたんじゃないかと思いますね。ある意味、「具体」というものは関西で、大阪で、あるいは芦屋で生まれてきたというのが良かったん違います？「具体」が注目されて発展していく上では良かったんじゃないか。というのは東京というのは、やっぱり外国からやって来る色んな傾向に目を向けたがりますからね。自分の足元のものはあんまり見ないというか。まるっきりそうでもないですけどね。ただ海外の傾向と照らし合わせながら見ていくという傾向がちょっとあったんじゃないか。だから「具体」が向こう [東京] で生まれていたら…。向こうで白髪 [一雄、美術家・元「具体」メンバー、1924-2008] さんが泥の中転げ回ったりした [《泥にいとむ》、1955] けど注目されなかったでしょ。関西の場合はそういう外国の傾向にそれほど影響されなかったんと違いますかね。

—「具体美術の 18 年」展 [大阪府民ギャラリー、1976] をされた時の館長は村松さんなのですね。

あの時の館長が村松さんですね。私が主にやった展覧会ですね。村松さんは館長でしたけど。18 年展を村松さんは直にやっていないですね。館長という立場で関わっただけで。カタログに名前出ていますが、主にやったのは私と「具体」の吉田稔郎 [美術家・元「具体」メンバー、1928-

1997]。

—吉田稔郎さんが「具体」の細かいことはよく承知されていたんでしょうか？

吉原製油の社員でもあったわけですから、「具体」の事務的なことは彼がやったわけですね。他の人間はやっていないですよ（笑）。ほぼ一人でやっていた。

—吉田稔郎さんのお話はあまりインタビュー等でも残っていませんね。

彼はこういう言い方はどうかと思いますけど、作家として十分な活動、活躍をしていないですよ。「具体」の事務的なことで忙しかったんかも知れませんが、「具体」が始まってまもなくやったのが、どこかの工場のうえからクレーンでぶら下がって上から絵の具を落として描いていた。その写真はよく出てますよ。工場の天井にクレーンあるでしょう、あれにのって下に大きいキャンバス広げて。「具体美術の18年」展のカタログに入っていると思います。

—最初に「具体」と接触されたのはいつですか？

野外展 [真夏の太陽にいでむモダンアート野外実験展、1955 / 第2回野外具体美術展、1956] 観に行きましたよ。1927年生まれですから28歳くらい。産経に入って5年ほど。産経に入ったのは、昭和27年。「具体」ができたのは昭和29年。

—では野外展は産経新聞の記者としてご覧になっていたということでしょうか？

そうです。まだ美術を持ってすぐの頃ですよ。あの展覧会ではね、出品作家がその辺をうろうろしていた、とかではないですよ。作品だけが合ったという感じです。まだ「具体」以外の他の作家とかなんかが見にくるほど、「具体」の名前は知られていなかったから。私も書いていないと思いますよ（笑）。私、新聞社に入ってすぐ美術を担当したんとちがいますから。1、2年ほどあいていますから。

—この頃はまだ美術担当の記者ではなかったのでしょうか？入社3年目ですけれども。

美術担当にはなっていた時期だと思う。そうやないと行かへんと思うし。昭和39年3月に退社。村松さんが定年になって辞めていて。彼が大阪芸大に行くようになったんです。村松さんが私を大阪芸大にひっぱってくれて。せやからもすごく世話になっているんです。

—新聞社を退社されてから、大学の先生の期間が長くあるんですね。

昭和40年くらいから、30年行っていましたよ。というのは向こうは定年が70でしょう。辞めた時に30年を越していたから名誉教授というのにしてくれたのですね。

—記者から大学の先生、だいぶ雰囲気やライフスタイルが違ってくると思います。

ですけどね、美術記者を辞めたわけですけど、評論家的な仕事をやっていたから。いろん

な美術雑誌に書いたりとか。美術界との接触は変わっていないですね。

—現代美術センターにはどの位いらしたんですか？

昭和 52 年、村松さんから引き継いで。それから朝日ビルへ移動して現代美術センターという名前に変わった。以後、徳島の仕事を始めるまで現美センターにおりました。

—なぜ大阪府民ギャラリー時代に「具体」展をしようということになったのでしょうか？まだ美術史的に価値づけられている時代ではありませんよね。

吉原治良が亡くなったということが大きいでしょうね。1972 年に亡くなって。1976 年に「具体美術の 18 年」展。誰が言い出したのかなあ。「具体」解散後はじめてのまとまった大きな展覧会。「具体」があった時代も展覧会はやっていますけど、こういう「[具体]」の活動を総括するような] カタログは作っていませんからね。資料は吉田稔郎から [提供された]。

—吉原治良さんとは何度かお会いになって。

そんなにじっくり話したわけではないですけどね。芦屋にお邪魔したことももちろんありますけど。ピナコテカの倉庫はつぶすとか、そういう話になっていたと思います。道路に引っかかってね。高速道路。別のところにピナコテカを作るとかそういう話もありましたけど。吉原さんもおらんようになって、できんようになりましたね。

—50 年代は小さなグループができました。

50 年代というのはある意味で一番難しい時期。新しいものが出てくるけど、以前からの力いうか、重みがやっぱりまだありますからね。

—戦後という文脈で見た時に、1950 年代が持っている特徴というのはありますか？

ひとつはそういう状況にその作家本人がいくつ位の歳でぶつかるかということが大きいんじゃないでしょうか。つまり例えば 20 歳位の人だったら白紙ですけど、40 歳位の人だったらかなり何かに染まっていますよね。つまり団体の色に染まっているとか。その違いが随分あると思います。そういう違いによって新しいものの受け入れ方が違ってくるでしょう、多分。前のものを捨て切れない。20 歳位だったら白紙の状態を受け入れるから。片方はそうじゃない。美術の場合でもそういう事があるんじゃないか。それまでの美術に対する見方がある。そこに例えば「具体」が出てくる。なんやこれ面白いなあって思うかどうか。その人の性格にもよるでしょうけど、受け入れ方は [人によって] 随分違うでしょうね。

* 文中、[] 内は補足。

聞き手：國井 綾（大阪中之島美術館準備室学芸員）

森口 まどか（美術評論家）